

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本論文のテーマである「学業領域における非積極的態度」とは、授業を欠席したり、課題に取り組まなかったり手を抜いたり、単位を落として留年を繰り返したりといった学生の学業領域における怠惰や不適応の問題の総称とされる。本論文は大学生の学業領域における非積極的態度の認知的側面を探索的に検討し、そこから学生を群分けすることで、新たな青年像の存在を明らかにすることを目的としている。

大学生の学業領域における非積極的態度については、古く 1950 年代からアパシーや無気力の問題として多くの心理学的研究が積み重ねられてきた。しかし 2000 年代以降の研究はわずかにしか行われていない。スチューデント・アパシー研究がさかんに行われ始めた 1980 年代は「大学のレジャーランド化」といわれ、大学生の留年や退学が社会問題化したのに対して、2000 年代以降は「大学の学校化」「学生のまじめ化」が起こり、留年や退学に陥る学生は減少している。本論文はこの青年期発達の時代的背景の変遷に着目し、学生自身の認知的側面を検討する必要性を特に強調している。そして学業領域における非積極的態度の認知的側面を実証的に検討することで、現代という新しい時代の青年の姿を浮き彫りにしようという新しい試みをしている。つまり本論文は新しい青年論を提唱しようとしたものであり、この点で目的に大きな意義と独創性が認められる。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本論文では心理学の手法である質的研究法と量的研究法の 2 つの研究手法が用いられている。質的研究については、研究 1 で自由記述式の質問紙調査が行われ、研究 2 で半構造化面接調査が行われている。量的研究については、研究 3 以降で複数の心理学的尺度を用いた質問紙調査が行われている。いずれも心理学の分野においては適切かつオーソドックスな研究方法である。

また 8 つの研究を組み合わせた緻密な研究計画が練られており、本論文の研究方法は当該学問分野において妥当なものである。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

いずれの研究においても、倫理的な配慮について明確に説明されている。すべての調査で調査協力者に、研究の目的と、回答しないという選択が可能であること、得られたデータは研究のためだけに使用されること、個人が特定されないように分析結果を記載すること、研究終了後にデータを破棄することが研究者から直接説明され、同意が得られている。データの収集法は適切である。質的研究のデータは、KJ 法と修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) によって分析され、量的研究のデータは、統計的検定 (相関分析, クラスタ分析, 分散分析) によって分析されている。いずれの分析も心理学の領域において定式化されている手法に則って行われており、得られた結果や数値は客観的で信頼に足るものである。以上からデータの収集, 分析いずれも適切になされていると判断する。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本論文は3部から構成されている。第I部の序論：理論的考察では、先行研究の概観にもとづく理論的な考察が丁寧になされており、学業領域における非積極的態度の現代的な研究意義と目的が明確に示されている。第II部の本論：実証的研究では、序論で述べられた目的にしたがって8つの実証的研究が順番に積み重ねられており、すべての研究が一連の流れの中で考察されている。8つという研究数は多く、論文としてレベルの高いものとなっている。第III部の結論：総合的考察では、研究で得られた知見をまとめたのちに、本研究で明らかにしようとした新しい青年像の存在について考察が行われ、結論づけられている。目的にもとづいた結果の考察が行われたうえで結論が述べられており、学術的な水準に十分達しているといえる。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本論文は、学業領域における非積極的態度の認知の「労力回避」「葛藤」「達成非重視」という3つの側面を明らかにした。「達成非重視」は、先行研究においては明らかにされていない側面である。また学業領域における非積極的態度の認知的側面の違いによって、現代の学生は「積極群」「非積極群」「回避―葛藤群」「中間群」の4つに分類された。学業領域における非積極的態度が探索的、実証的に検討されている。

さらに本論文は「回避―葛藤群」と「中間群」の違いに焦点を当てている。一見不適応に見える「回避―葛藤群」は、回避し葛藤しているからこそ進展のある群と考えられる。一方「中間群」はアパシーやモラトリアムやアイデンティティや個人の主体性や病理的なパーソナリティのいずれとも関係がない、中庸さが特徴の群であるからこそ、達成感が得られず、次の段階に進めない群と考えられる。この2群の違いは、時代の変遷を背景とした新しい青年像の可能性を示唆するものであり、この点で本研究において有意義な知見が得られたと考えられる。本論文は十分に取得学位にふさわしい意義や成果が認められる。

上のことより、審査委員会では全員一致で、本論文が博士（教育学）の学位にふさわしいものであると判断した。